

聖典の伝承と伝統的な宗教教育

世界の宗教伝統において、聖典は長年にわたって「語られる聖典」として途絶えることなく、世代を超えて継承されてきた。エクリチュールによってではなく、パロールとして声と記憶によって伝えられてきた。口頭伝承された聖典の内容は、ほぼ完全に一定であった。このように断言できるのは、聖典の口頭伝承性が、たとえばヒンドゥー教やイスラームにおいて、伝統的な教育システムを背景にもっていたからに他ならない。

世代を超えて、聖典が記憶によって継承されてきたこと背景には、聖典の口頭伝承を長年にわたって支えてきた伝統的な宗教教育の存在があった。そうした伝統的な宗教教育の場は、ヒンドゥー教の伝統では「パータシャーラー (学校)」と呼ばれ、イスラームの伝統では「マドラサ (学校)」と呼ばれてきた。今回は、ヒンドゥー教の「パータシャーラー」とイスラームの「マドラサ」の様相を取り上げることによって、宗教伝統における「語られる聖典」の口頭伝承性の背景を考察してみたい。

ヒンドゥー教の「パータシャーラー (学校)」

インドでは、19世紀になってイギリスの統治のもと、近代学校制度が導入されたが、それまでは都市部であれ農村部であれ、インド全国の至る所に、古代より継承されていた伝統的な宗教教育組織があった。それは日本の江戸時代における、いわば寺子屋のような教育機関で、サンスクリット語で「パータシャーラー (学びの場、学校)」(pāthasālā) と呼ばれていた。それはヒンドゥー教寺院に付属しているか、あるいはパンディット (伝統的な意味での「師」) の自宅に設けられていた。パンディットはヒンドゥー教寺院に属するバラモン僧であった。パータシャーラーで学ぶ学生たち (ブラフマチャーリン) は、おもにバラモンの子弟であったが、クシャトリアもヴァイシヤも就学することを許された。

パータシャーラーにおける初等教育のおもな内容は、実生活における読み、書き、計算であった。パータシャーラーにおける高等教育は、サンスクリット語でパンディットによって、おもにヴェーダ聖典およびヴェーダ補助学が教えられた。学生たちはパンディットとともに寝食をともにしながら教育を受けた。インドの伝統的教育では、パンディットから弟子への口頭伝承が重要視された。ヒンドゥー教はただ単に宗教として精神的なものであったばかりでなく、日々の生活そのものであった。⁽¹⁾ インドのいたる所で継承されてきたこうした伝統的な宗教教育は、19世紀になってイギリスが近代学校制度を導入したことで、19世紀末になると次第に衰退していった。伝統的な教育組織を支える経済基盤の弱小化に加えて、都市部を中心とした英語教育が推進されたからである。

そうした状況にあつて、今日もなお、たとえば、マイソールのシャンカラ派 (スマールタ派とも呼ばれる) の総本山、シュリンゲリー僧院の伝統では、僧院内にパータシャーラーが併設され、伝統的な宗教教育がおこなわれている。そのパータシャーラーは公式に「聖なる真の知識を活らせるサンスクリット大学校」(Śrī Sadvidyā Saṃjīvinī Sanskrta Mahāpāthasālā) と呼ばれる。このサンスクリット学校では、13人のパンディットと約70名のブラフマチャーリンが学んでいるが、ヴェーダ聖典をブラフマチャーリンたちに記憶させることを目的とした宗教教育がな

されている。シュリンゲリー僧院はシャンカラ派総本山ということもあり、特にヴェーダ聖典の伝統を次世代へ伝えていくために、ブラフマチャーリンたちにヴェーダ聖典や儀礼的行為の知識を伝えることに力を入れている。筆者がシャンカラの哲学を学んだパンディットのシュリーニヴァーサ・シャーストリーも、生涯、シャンカラ派信仰に生きたが、幼少時からパータシャーラーにおける伝統的教育を受けて育った。

イスラームの「マドラサ (学校)」

イスラームの伝統においても、クルアーンなどの聖典を記憶し口頭伝承するための学校、すなわち「マドラサ」(madrasa) が、長年にわたって伝統的な教育の役割を担ってきた。「マドラサ」とはアラビア語で、ヒンドゥー教の「パータシャーラー」の語と同じく「学びの場、学校」を意味し、イスラーム諸学を対象とする教育組織である。近代教育制度が導入される以前の本来のマドラサは、イスラーム神学、イスラーム法学、アラビア語諸学などを中心とした高等教育機関であった。その伝統的な宗教教育機関はモスクに併設される場合が多く、イスラームの聖典テキストの口頭伝承をふまえた教育がおこなわれてきた。

マドラサは10世紀ごろ、イランで建設されるようになったが、それまではモスクで伝統的な宗教教育がおこなわれていた。11世紀後半、セルジューク朝のワズィール (宰相) であるニザームルルクが主要都市にニザーミーヤ学院を創設したことなどを契機として、マドラサが各地に設けられた。東方では、13世紀のデリー・スルタン朝期のインドにおいて、西方では、14世紀のスペインでも建設された。こうしてマドラサは世界的な広がりをみた。この教育機関では、イスラーム法の教育が一般的に重視されたほか、伝承学、神学、アラビア語学などが教えられた。近代になって、各地で西洋の教育制度が導入されると、一般的にマドラサの役割は減少していったが、イランなどのように、マドラサが依然、重要な役割を担っている国もある。⁽³⁾

イスラーム研究の世界的碩学である井筒俊彦によれば、青年時代にイスラーム思想を学んだ師ムーサーは、「イスラームでやる学問の本なら何でも頭に入っている」と井筒に語ったというが、その言葉の背景には、こうした伝統的な宗教教育の存在があったのだ。こうした伝統的な宗教教育の存在を視野に入れて聖典テキストを捉えなおすとき、宗教伝統における「語られる聖典」の意義がいつそう明らかになるし、また同時に、宗教伝統における聖典のパロール性と信仰の関わりもより深く理解できるだろう。

[註]

1. 拙論「都市と教育—ヒンドゥー教の場合—」(板垣雄三・後藤明編『イスラームの都市性』亜紀書房、1992年、377～378頁)。
2. 詳細な内容については、拙著『シャンカラ派の思想と信仰』(慶應義塾大学出版会、2016年)、137～141頁を参照。
3. 森本一夫「マドラサ」(大塚和夫編『岩波イスラーム辞典』岩波書店、2002年、921～922頁)。イスラームの教育における詳細な内容については、西野節男「ムスリムはどう教育されるか—インドネシア—」(片倉もとこ編『イスラーム教徒の社会と生活』栄光教育文化研究所、1994年)、85～116頁を参照。